

- 1 派遣期日 平成 29 年 6 月 23 日（金）～ 6 月 24 日（土）
- 2 研修先 学校名（会場名）千葉大学附属小学校
所在地 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33 HP <http://www.el.chiba-u.jp/>
- 3 研修内容
研究テーマ 外国語活動の教科化を見据えた授業づくりと実践
技能をバランス良く取り入れた授業づくりと実践を学ぶ

(1) 視察校における研究への取組み

「学びを楽しむ授業」

対話する力を育む外国語活動
～文字情報を用いた理解可能なインプットのあり方を探る～

① 「学びを楽しむ授業」とはなにか。

千葉大学附属小学校では、「学びを楽しむ授業」を主題とし、研究に取り組んでいる。「学びを楽しむ」とは、児童が自らの関心や疑問に基づいて調べたり、友達の意見に触発されて考えたり、問題を解決するために話し合ったりしながら学びを追求することであり、文科省で提示された「主体的・対話的で深い学び」と一致する内容となっている。児童が、教師が想定した通りに学んでいくとは限らず、一見授業の趣旨とずれた行動を取っているようにみえても、そこには、深い学びが隠されているかもしれないという考えをもとに、児童の学びをより広く捉え、授業改善に取り組んでいる。

② 対話する力とはなにか。

「相手の話す言葉を理解したり、簡単な単語や文を読んだりする力（聞く・話す）」と「意思や情報を相手に伝えるために、あらゆる既習語彙・表現を使って話したり描いたりする力（話す・書く）」の 2 つの技能と、コミュニケーションへの意欲の 3 要素から生まれる力である。この「対話する力」は、小学校段階もしくは学習履歴を踏まえた対話力であり、将来的な言語能力やコミュニケーション能力を規定するものではない。

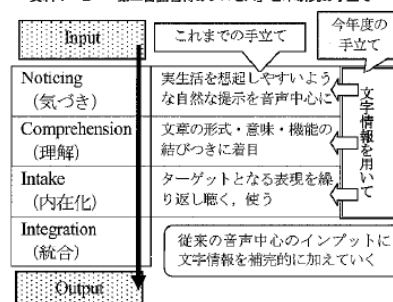
③ 理解可能な文字情報のインプットのあり方とは。

附属小学校では、対話する力を育むために「第 2 外国語の習得プロセス」を基本的な枠組みとして授業づくりを行っている。プロセスについては、右記の通りである。気づきや理解の一助とするために、従来の音声中心のインプットに文字情報を補助的に加えている。

《文字情報を使用する際の留意点・期待される点》

- 子供の知的欲求に合致している
- 記憶内容を定着・蓄積させる。
- 自習を可能にし、学習教材を拡げる。
- 音声の把握を自覚的・分析的にさせる。

資料 1-2 「第二言語習得のプロセス」と本研究の手立て



(2) 研究授業

① 1-3 Let's go to the World of Insects.

テーマ：アルファベットの名称と音との関係に気付かせていくにはどうすればよいか

千葉大学附属小学校 清水 佑 ALT マリア・マルザン

○担任が T1 として、授業を行い、帯活動である ABC ソングから、学習の課題であるマッチングゲームにスムーズに導入されていた。ICT を活用し、スロットのように、虫の名前の頭文字をシャッフルしていくことで、どのアルファベットが頭文字なのかを考える手立てになっていた。

○プロジェクターに文字と絵を映したフォニックスソングを毎時間繰り返し歌う活動を行

うことで、自然と文字と音との繋がりができていた。そのため、プロジェクターに異なる頭文字が表示されると、「ちがう！」「No, No. NO!」と活発に反応する様子や、間違ったアルファベットで発音して、音の違いに気づいている児童も見られた。

○仕上げの活動では、文字だけが書かれた虫の名前の単語カード（めくると絵も見れる）を用いてのマッチングゲームを行っていた。最初は絵を見せながらペアを探している児童が多かったが、段々と、頭文字の音や単語を発音してペアを探す児童が増えていた。頭文字の単語の音と文字の結びつきを感じながら学習に取り組むことができていた。

② 3-2 I Have Two Brothers.

テーマ：文字を伴ったインプットを通して、名詞の単数形には冠詞の a がつくことを理解させるのにはどうしたらよいか

千葉大学附属小学校 小畑 貴紀 ALT マリア・マルザン

○ HRT と ALT との導入の掛け合いでは、プロジェクターに場面の動画や文字を同時に流していくことで、音と文字（視覚情報）を関連づける方法が使われていた。児童は既習事項から内容を読み取り、本時のターゲットセンテンスに気づくことができていた。

○ I have a ～. と I have two ～s. の違いを学習するために、二人で 1 台タブレットを用いて練習する方法が用いられていた。タブレットに次々出てくる問題を繰り返し解くことで、「最初に a がつくのは 1 この時だ」「～s は、たくさんの時だよ。」などの気づきの言葉を発している姿が見られた。

(3) 研究協議会・教育フェア

対話する力を育む外国語活動文字情報を用いた理解可能なインプットのあり方を探る－教科化を見据えて 小学校英語活動のプラン作り

○対話する力とは、理解する力（聞く・話す）と伝える力（話す・書く）の両方の力をバランス良く育むことでつく力である。理解可能なインプットとは、今よりも少しだけレベルが高く、しかし既習事項を用いれば理解可能なものを指す。低学年では、文字の形と名前を結びつけること。中学年では、文字の形と名前と音（フォニックス）を結びつけること。高学年では、文字を写す・書くこと。が目標になりうる。

○新学習指導要領では、話す・(talk)聞く+話す(speech)・書く・読むことが指導内容に加わる。(1)③で記述したような、第 2 外国語の習得プロセスをもとに学習指導案を作成していく必要がある、教材や内容を考える際には、以下の項目を確認して計画する必要がある。

①英語を使う必要性・必然性があること

②日常に即した会話であること（挨拶からはじめるなど）

③必要になる会話であること（イミグレーションや病院での対応など）

○新学習指導要領では、文の仕組みやルール、文字や音のつながり・結びつきに気づくことが目標に加わる。意味を理解していることは、文の構造や機能に目を向けやすくなることに繋がる。仮説を立て、検証していくような学習過程が望ましい。writing は、①見る②なぞる（空書き）③写すと段階を踏んで、ひらがなを学ぶように学習していくとスムーズな技能習得につながる。

4 感想

今回の研修では、教科としての外国語の授業づくりの研修や、4 技能をバランスよく取り入れた授業づくりと実践を通して多くのことを学ぶことができた。外国語の音声だけでは意味を理解することが難しいときに、文字情報を用いることが、理解の助けになるということがわかった。たくさんの音声を聞かせることができるというのは、外国語活動の良さのひとつであるので、その良さを残しつつ、文字情報を適宜入れていきたい。また、教え込みではなく児童が主体的に書きたい、読みたいと思えるような教材や活動を取り入れていくことが大切であると感じた。どの授業実践や研修においても、楽しみながら学んでいくことが、学習意欲の向上や技能に生かされていくのだということが共通していえるのではないかと考える。それは、児童だけでなく教員も含めてのことであり、外国語活動の教科化に向け、授業の準備だけでなく、HRT として外国語を積極的に使って楽しもうとする思いをもって取り組んでいきたい。今回の研修の機会をいただけたことに感謝し、これからの教育活動に生かしていきたい。